



令和4年10月

発行者  
たんぽぽ会  
(東京学芸大学  
幼稚園科同窓会)

〒184-8501  
小金井市貫井北町4-1-1  
東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎  
042(329)7813



### 『心が動く時、 夢中になる時を共有して』

たんぽぽ会会長 田村 秀子

今年の夏は昨年にも増して猛暑となり、最高気温が40℃に達した地域もありました。また短時間に大雨が降るなど急激な変化が起き、地球環境の悪化が懸念されます。そして新型コロナウイルスの変異株が次々と現れ、心配な日々が続きました。

ロシア軍のウクライナ侵攻にも心が痛みます。映像を見る度に自分にもできることはないかと考えさせられます。関心をもち続けていきたいと思えます。

そんな中でも、子供たちが面白いことを見付け、夢中で遊ぶ姿を見ると心がなごみ、未来を生きる子供たちの今を大切にしたいくなります。先日、第七十回全国幼児教育研究大会東京大会の第一分科会で司会を務めました。その分科会のテーマが「心を動かし、夢中になって表現する」でした。皆さんの園や学校では、子供たちが身近な環境に関わって心を動かし、夢中になって表現したりしていますか？  
分科会のグループ協議の中で「子供たちがこれを使って遊んだら楽し

いだろうなと思って準備するけど、見向きもしない時もあるし、えっ、こっち？と思うくらい、予想外のことで夢中になっている時もあります」「初めは何してるのかなと思っただけ、自分もやってみたらけっこう面白かったですよ」など、いろいろな話が出ていました。会場参加とオンライン参加を合わせてハイブリッド開催にしたのですが、オンライン参加の方からも「同じものを準備していても、さりげなく近くに置いたり、『これどう？』って出したり、先生が黙々と使い始めたりなどいろいろな出し方があり、タイムミンクがあり、様々な素材とどう出合わせていくかが難しいと話し合いました」などチャットでいろいろな報告を受けました。本当に子供たちはいろいろなものに心を動かしていて、その思いをキャッチできる時もあるれば、気付かなくて後から他の先生が教えてくれたり、受け止めてくれていたことを知ったりすることもあったと思います。シャボン玉を飛ばしていたと思ったら、雨上がりの水たまりにシャボン玉がくっつくことに夢中になっていたり、カメの水槽洗いや掃除がこが始まったりなど、一人一人の発想や身近な物や自然、友達との関わりを通して楽しさが広がる姿を見付けるのが楽しみです。

7月末に学年合同で大きな紙にローラー遊びをしていた時、年長児がどんどん楽しみ始め、担任が「楽しそうだから片付けの時間を延ばしませんか？」と言ってきました。私も同じように感じていて、子供と周りの先生たちとで楽しさを共有できたことが嬉しかったです。

地球の未来を世界の人と共に創っていく子供たちには、心が動く楽しさや面白いと感じたことを夢中で表現する楽しさ、思いを共有する楽しさをたっぷり味わってほしいと思います。

私の初夏の楽しみはたんぽぽ会から刺激を受け、樋口一葉ゆかりの場所を見付け、一葉の文章を読んで昔の西片の町を想像することでした。これからもたんぽぽ会で楽しさを見付け、視野を広げていきましょう。



# 【大学より】 集い、行き交うことの楽しみ

東京学芸大学 幼児教育教室 特任准教授 山崎 寛 恵

二〇二〇年度以降、大学教育における新型コロナウイルス感染症の影響は依然として続いています。この原稿を執筆している二〇二二年七月現在もまたコロナの脅威が高まっています。ワクチンの普及や感染対策の強化等により、春学期は、ほぼ通常通りの授業を行うことができま

した。  
本教室でも、数年ぶりに四学全年員が集まる機会を設けました。六月、附属幼稚園小金井園舎の遊戯室や保育室をお借りし、四年生の企画進行のもと、『幼児教育スポーツ交流会』が催されました。四学年が複数のグループに分かれて様々な活動を楽しむ中で異学年間の親交を深めました。一年生は春学期必修科目「幼児教育入門セミナー」でも、小金井園舎で

歌を披露する機会をいただきました。

コロナ禍の影響で、学生が授業外に附属園を訪れる機会が減ってしまったのですが、状況の許す限りではあります。保育の姿を肌身で感じてほしいと思います。私自身も今年度は授業を通して、小金井園舎に何度かお邪魔しました。今年は早くから猛暑がきていますが、マスクを着用しつつ園児たちとの細やかなコミュニケーションや環境設定への心配りをされている先生方のお姿を拝見し、子どもの成長を支える実際の姿を勉強させていただいています。小金井園舎、竹早園舎の歴史ある保育のことを、より知っていきたくと思います。どうぞよろしくお願いたします。

春学期に担当した科目「幼児心理

学演習」では、履修者の三年生とともに、大学構内で子どもたちがよくいる場所を選び、子どもたちの過ごす様子から、それぞれの環境の特性を調べました。私は本学に着任して三年目ですので、三年生とは東京学芸大学歴が同じです。一緒に構内を歩き回り、午後三時頃には学内の「この辺りに子どもたちがいるんだな」といったことを調べたり、プレイパークで実際に遊んだり、学内の抜け道を発見したりと、私たちにとつても、大学という場所を知り、馴染む時間となりました。あるコミュニティに参加することに伴う実感、自分の居場所となる営みは、日々のとりとめのない出来事を通して知らず知らずのうちに得られているようです。

余談ですが、この春入学した一年生に、自己紹介で「今はまっていること」を話してもらいました。「東京に来て、いろいろな文房具屋さんを見に行くのが楽しい」、「スパーでアルバイトを始めてレジ打ちが楽しい。でもカゴ山盛りの人が来ると

ちよつと嫌」、「塾の講師を始めました。教えたり質問に答えたりするのが楽しい」、「メイクをするようになって、YouTubeでいろいろなメイクを試しています」、「一人暮らしを始めたので、思う存分ゲームができます」などなど、みんなそれぞれに生活を楽しんでいる様子を教えてくださいました(授業中に眠そうな姿も...?)。

学生たちのけやき広場に集う姿、生協購買部で昼食を選ぶ姿、図書館でともに自習をする姿に、賑わいが感じられる春学期でした。学生たちはここ数年、彼らなりにある種の緊張感をもちながら、大学生活を送ってきたように思います。気のおけない仲間とともに学び語り合うこと、何かに没頭すること、何もしないこと(心を空っぽにして初めてわかること)は大学生生活の醍醐味であり、その後の人生の糧となります。時間は不可逆ですが、学生それぞれにとって、どうか少しでも豊かな時間になってほしいと願うばかりです。

**令和4年度  
たんぽぽ会  
総会  
研修会**

— 講師 神田 蘭さんをお招きして —

6月25日(土)

令和4年度たんぽぽ会総会は、感染症拡大など様々な状況に対応できるよう、文京区立第一幼稚園にて開催されました。昨年度のオンライン開催の経験を活かし、今年度は現地での参集とオンラインのハイブリッドで行いました。会場には18名、オンラインでは13名が出席しました。

総会では東京学芸大学辞職会会長の長谷川正様にご挨拶をいただきました。幼児教育の重要性や、同窓会が情報交換の場として充実していくこととの意義についてお話をいただきました。

本学幼児教育教室の平野麻衣子先生、山崎寛恵先生にもオンラインでご参加いただき、大学とのつながりを感じる事ができました。

総会では、令和3年度の事業及び会計報告、令和4年度の役員、事業計画案・会計予算案は全て承認されました。同日に開催された第一回研修会で

は、講談師の神田蘭さんをお招きし、「講談の世界へようこそ」お楽しみ講談」を実施しました。幼稚園の遊戯室の舞台上に手作りの高座と金屏風を設定し、寄席囃子が流れると遊戯室が寄席会場へと早変わり。雰囲気が高まる中で、神田蘭さんが登壇されました。

講談の演目は、会場のある文京区にちなみ『樋口一葉の生涯』にまつわるお話でした。本題の前に、講談と落語の違いや講談のイロハについてをお話くださいました。講談の歴史や語り方の特徴、使用する道具についてなどを楽しく分かりやすくお話しくださり、観客の気持ちもグッと引き込まれていきました。

**ここでクイズです！**

Q…一葉が想い人の半井桃水から指導を受けていることを師匠の中島歌子にとがめられ、「別れなさい」と言われたとき、一葉はどうしたでしょう？

- ① 師匠に逆らうと原稿を書かせてもらえなくなるので、別れた
- ② 別れなかった
- ③ 別れた振りをして、付き合い続けた

正解は①です。会場のたんぽぽ会員の回答は③が多く、「③を選ぶのは、したたかな方々です」と神田さんに言われてしまいました。会場は笑いの渦に…。

このようなクイズをはさみながら樋口一葉の生い立ちから名を馳せるまでの物語をお話くださいました。

七五調の言葉と張り扇で釈台をたたく音で、物語はテンポよく進んでいきます。登場人物の会話を交え、樋口一葉とまわりの人々の様々な出会いや人生の転換期となったであろう場面、そのときの気持ちなどを語ってくださいました。聞き心地のよい語り話術に引き込まれ、話の展開に期待したり思わず前のめりになったりしながら、笑いあり豆知識ありの、あつという間の90分でした。

神田さんは、講談を通して様々な話や歴史に興味をもつきっかけになれば」と仰っていました。樋口一葉の人となりを身近に感じ、歴史の一遍に触れ、講談の面白さを感じるひとときでした。オンラインで参加してくださったご来賓の皆様をはじめ、同窓生の会場参加の方々、オンライン参加の方々が共に楽しい時間を過ごすことができました。

また、今回は近隣にお住まいの歴史好きの皆様もお誘いしました。(先のクイズでも正解されていて、さすがで

した。(文京区西片は樋口一葉だけでなく、江戸時代のある地域です。地域の皆様も喜んでご参加くださり、地域の歴史をまとめた冊子をいただきました。たんぽぽ会を通じて人の輪も広がりました。



講談の様子

たんぽぽ会の研修会は、本年度も年に二回実施します。秋の研修会も、参集及びオンラインのハイブリッドで予定しています。本会29回生であり、元JICA海外協力隊・元公立幼稚園教員の小泉奈穂美様をお迎えし、『セネガルでの挑戦―「遊びは学び」を伝える―』と題してご自身のセネガル派遣での経験をお話しいただく予定です。ぜひご参加ください。

〈特集〉

# 学芸大 幼稚園科 卒業生の 活躍

「問い続ける日々

〜日本保育学会

研究奨励賞を受賞して〜」

三十八回生

練馬区立北大泉幼稚園

副園長 篠原 直子

私が、現職教員大学院派遣制度を利用し、母校の門を再びくぐることになったのは、世界がコロナ禍に陥る前年、平成30年の四月のことでした。懐かしい母校の正門前は、入学記念撮影の親子で長蛇の列、その横を通り過ぎながら、変わらない景色に不思議な心地でした。

昭和から平成に変わる頃、学部生だった私は、サークルやバイトに明け暮れて、公立幼稚園の採用試験も補欠で連絡待ち。心配された担任の小川博久先生が、当時園内研の講師をされておられた台東区の公立幼稚園に事務補助員として紹介してくださいました。コン

ビニのバイトと掛け持ちしながら採用試験に再挑戦する、そんな不肖の教え子でした。まさか30年余りも現場に留まり、しかも半世紀を迎える年齢になって、大学院生として母校で学び、さらに拙い論文が日本保育学会の第74回研究奨励賞をいただくようなサプライズが待っているなんて、本当に人生って何が起るかわかりません。

と同時に、振り返ってみると、新採の頃から、憧れの先輩や学びのチャンスに恵まれてきました。

元文部省(当時)の高杉自子先生が毎月園にいらっしやり、岸井慶子先生と共に保育をビデオに記録され、それを多くの先生方と繰り返し見返して話し合ったこと。ついにさっき自分が目の前で見ていたはずの場面なのに、ビデオに映し出されるその子の表情やことの顛末、周りの子どもたちの一挙一動に「自分が見ていると思うものは、ほんの一部なんだ」ということを突きつけられる日々でした。

それぞれの仕事場で悩んだり迷ったりしていた幼稚園科の仲間と、河邊貴子先生のもとに先輩方が集う自主研究会があると聞いて、月に一度、金曜の夜に吉祥寺の駅

に降り立つのを楽しみにしていたこと。そこで保育を語る先輩たちはキラキラと輝いていて憧れの存在でした。

第三子がダウン症をもって生まれた時、「もう仕事は続けられないなあ」と思いながら、当時の園長井口美恵子先生に報告に伺うと、「辞めるのはいつでもできるから、とにかく一度戻っておいで。続けるかどうかは戻ってから考えればいい。」と支えていただいたこと。あらためて、この道はたくさんのご縁によって紡がれて、導かれた現在なのだと思ふ気持ちが湧き起こります。

こうしてつながってきた現場でたくさん子どもたちや保護者の方々と出会う中で「多様な育ちを支え、共に育ち合うということはどういうことなんだろう」という問いが私のテーマとなっていくました。それは、ダウン症の我が子の子育てにおいて、「ゆるやかに育つ者に必要なのは訓練なのか」という疑問が、喉の奥の小骨のように引っ掛かっていたことも影響しています。保育者として出会った子どもたちに「もっと何かできたのではないか」という自責の念に

駆られる日々があったからでもあります。

大学院では学校心理専攻臨床心理コースに在籍しましたが、幼稚園科の授業にも参加させていただき、岩立京子先生に再びご指導いただく機会にも恵まれました。

研究では、特別な支援を要する幼児が複数在籍する学級の運営について、共に育ち合うインクルーシブな保育が構築されるプロセスを探り、そのための保育者の援助に関する専門性を明らかにしようと試みました。

今回の受賞では、担任保育者の語りを保育実践の観察記録と関連づけ分析することにより、保育者の視点を3つの軸として構造的に捉えたことを評価していただけたと嬉しく思っています。

問いに迫る道のりは、脈々と続いていて、その答えはほんやりとしか見えないけれど、目の前の子どもたちとの日々の中に、確かにあると信じています。これからも現場で出会う子どもたちとの日々を楽しみ味わいながら、「共に育ち合うインクルーシブな保育とは」という問いに向き合い続けていきたいと思えます。

## 「保育者養成の現場で」

四十六回生

玉川大学教授 田甫 綾野

保育者養成の仕事に就いて20年が経とうとしています。自分の仕事の成果が子どもたちの生活につながることは少なく、若い頃は虚しさを感じることもありましたが、最近では、教え子たちの活躍や、先生方の研修などを通して、間接的にはありますが、保育の実践に関わることができることを実感し、幸せに感じています。

大学教員の仕事は大きく分けて

①授業・学生指導②研究③社会貢献があり、これらは全てリンクしていて、どれも欠くことができないものだと思っています。

## ① 授業について

黒板に板書、ノートに手書き、一斉教授中心…という授業スタイルからPCで資料投影、LMS(Learning-Management System)経由での資料配布、Zoom等WEB会議システムを使っての授業、オンデマンド教材配信、反転授業等、また対面授業でも学生はPCを持参しノートテイクしており、大学の授業形態はこの数

年で随分と変わりました。

コロナ禍がこの変化を加速させたことは間違いありませんが、それ以前から勤務校ではアクティブラーニングが推進され、さまざまな形態の教室ができ、学生の多様な学びを保障する動きがありました。

そのような中で、授業のあり方も工夫が必要となつていきます。これまでの講義+グループディスカッションというだけではなく、LMSを使つての教員と学生の双方向のコミュニケーションや、学生同士のディスカッションボード、ルーブリックを使つた評価を促すためのシステム等々さまざまな方法での授業運営が求められています。授業の中身だけではなく、学習方法もあわせて検討する必要があります。試行錯誤する日々です。

## ② 研究について

文科省が新しい教育実習のあり方を検討していると報道されました。現在の大学在学後半に集中的に行う実習から「学校現場での教育実践を段階的に経験する」方向で検討されており、「理論と実践の往還を重視した教職課程」への転換と位置付けているようです。

(日本教育新聞 令和4年2月21日)

私が最初に勤めた養成校(現在は閉校となっております)では、まさにこのような形の教育実習を行なっていました。この実習は往還型約一年間毎週一回同じ実習園に行き、翌日にその振り返りを養成校で行う)のもので、学生の成長を実感するところがありました。また長く保育者を続けている卒業生も多く、実習として意味のあるものだと感じていました。

その実習の効果を明らかにするべく、現在共同研究を行っています。当時の学生及び実習園へのアンケート調査をはじめ、当時の学生へのインタビュー調査、また実習日誌の分析などを行い、往還型の実習がどのような学びを生み出しているか分析しています。

現在までの結果としては、実習園の指導教員と実習生がインタラクティブな関係を築けることが、実習での学びの大きな要因となっていると考えています。

別の共同研究では、学生の学びを促す実習日誌のあり方等も検討しています。具体的にはドキュメンテーション型(写真を用いた記録の方法)の実習日誌を導入し、その学びの効果を分析しています。ドキュメンテーション型の実習日誌は写真があるの

すかったり、文字だけの記録に比べて苦なく書けたりというよい面がありますが、何より、指導してくださる先生と学生とが、ドキュメンテーションを通して子どもたちの遊び等について共に語り合えるところに大きな意味があると考えています。このように実習においても教授型の学びではなく、学生がアクティブに学べるのが学習としての効果が高いのではないかと思っています。

## ③ 社会貢献について

保育現場の研修や講演等の他に、さまざまな分野のお仕事もさせていただいています。

現在はJAXAの暮らし・ヘルスケア分野「THINK SPACE LIFE」の活動理解促進のお手伝いをしています。聞き馴染みのない分野だと思えますので、ぜひインターネットで検索してみてください。宇宙での生活は今の子どもたちにとっては夢物語ではなく、現実の出来事になるかもしれません。子どもたちが、宇宙での生活を遠い世界の話ではなく、自分ごととして捉え、興味をもってくれたらと思っています。

各期のたより

「LET IT GO

〜ありのままです〜」

四十四回生 井上 里美

44回生は『幼稚園科に男子学生が二名も入学!!』と、学内でも少し有名!? (話題?) になっていたことを記憶しています。今では男性の保育士や幼稚園教諭は珍しくありませんが、当時は「保育士」が「保母」と呼ばれていたような時代でした。

ダイバーシティ&インクルージョンが注目される昨今ですが、私たちは、まさにそれを実現していたのではないかと今になって感じています。44回生は本当に個性豊かなメンバーでしたが、お互いを尊重し、認め合っていました。一言で言えば、幼稚園科はありのままの自分でいられる心地よいところでした。

素敵な仲間に出会い、同じ時間を過ごせたことは本当に幸せなことでした。頑張りすぎずにありのままです。また笑顔のみんなに会いたいです。思い出話、今、そして未来の話に花を咲かせたいと思っています。

親支援カウンセリングの

営みを慈しむ

三十四回生 中島 祐子

はじめまして。懐かしき幼稚園科時代、故小川博久先生の親心の愛情に触れさせていただけしたこと、感謝でいっぱいです。

私は40代で一念発起、大学院で臨床心理学を学び、我が子がお世話になった幼稚園で保護者へのカウンセリングをしています。私自身が悩みを抱えやすく、ユニーク派の子育てで息詰まった時、SOSを受けとめてくれる温かな支えがあって、大切なことに気づけた体験が幾度もあったからです。また、個々のペースに添ってじっくり関われる営みが、自分らしいと感じています。園カウンセリングは、日頃様々な役割を担うお母さんが正直な気持ちを吐露し、受け入れ、自分自身に立ち返るひとときです。溜まっていた涙と共に柔らかな物腰となり、緩んだ空気が家庭へ循環します。その方本来の素晴らしさが蘇り、愛の扉が開いていく道のりに同伴できる喜びと感謝が私の原動力です。子育て奮闘中の母親こそ自分を大切にすることが必要! そんな信念と共に励んでいます。

(浜松学院大学付属幼稚園 親支援カウンセラー)

たんぽぽ会のホームページができました!

研修会の情報やたんぽぽ会からのお知らせを載せていきます。ぜひご覧ください。



<たんぽぽ会のメーリングリストにご登録ください!>

研修案内等、たんぽぽ会からの情報が届きます。下記のメールアドレスまでお名前と何回生か(または卒業した年)を添えてメールをお送りください。

tampopokai.tgu@gmail.com

<会費納入のお願い!!>

たんぽぽ会の維持運営のため、会費のお振り込みをお願いします。12月末日までにお振り込みください。

会費 2,000円  
振込先 三菱UFJ銀行 小金井支店  
普通口座: 0427768  
口座名: 東京学芸大学幼稚園科同窓会

会長 田村 秀子

※ 振込人には何回生かの数字とお名前を入れてください。

《インフォメーション》

★令和4年度秋の研修会 令和4年11月26日(土) 14:30～  
(ハイブリッド開催の予定)

★令和5年度たんぽぽ会総会・懇親会

令和5年6月24日(土) 予定  
東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎にて

★令和4年度卒業論文発表会

令和5年1月21日(土) 9:00～  
開催方法は未定

令和4年度 たんぽぽ会役員

- 会長 田村 秀子(29回生)
- 副会長 小澤 明子(30回生)
- 宮本 実利(34回生)
- 庶務
- 研修 青山 伸子(36回生)
- 女屋 旬子(36回生)
- 大川 美紀子(44回生)
- 澤田 亮(51回生)
- 会報 川崎 暁子(46回生)
- 山本 遼(60回生)
- 事務局 八木 亜弥子(48回生)
- 会計 船水 智恵子(58回生)
- 浅見 梨央(66回生)
- 会計監査 東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎  
園長・副園長
- 監事 井口 美恵子(21回生)
- 永井 由利子(21回生)